

## UD天文シンポジウム

## はじめに

## ～ユニバーサルデザイン天文教育研究会の趣旨と成果～

嶺重 慎 (京都大学)

## 1. 趣旨と概要

「ユニバーサルデザイン天文教育」とは、従来の天文教育普及活動でとかく忘れられがちな障害者や病院に長期入院中の子どもなど、マイノリティの方々を意識した天文教育活動を意味します[1]。その基本的考え方や普及のための方策を討議し、新たなネットワークを形成する目的で、2016年9月24日～26日に国立天文台三鷹で第3回研究会を開催しました(主催:国立天文台、共催:IAU国際普及室、天文教育普及研究会)。

今回の特色は、①グループワークショップおよび②国際セッションの実施でした。

日本には海外に誇るべき優れた体験活動や教材があります。その多くは、天文教育施設や観望会グループ等において創意工夫して開発された低価格な教材であり活動です。しかし教材や活動はローカルに閉じていることが多く、全国的な共有が不足しています。海外発信もまだまだです。そこで、招待／一般講演に加えて、出席者が主体的に参加する少人数ワークショップに多くの時間を割きました。出席者数は、3日間でのべ131名(うち視覚障害者9名、聴覚障害者16名)、海外15か国・地域からの参加がありました。

## 2. シンポジウムの主な成果

3日の会期のうち、最初の2日間で広く参加をよびかけた日本語セッション、3日目が英語による国際セッションでした。本集録は最初の2日間についてご報告するものです。

(3日目の内容については「ユニバーサルデザイン天文教育を実践するためのガイドライン」の形にまとめる方向で準備中です。)

今回、目玉の①ワークショップ実施と②国際化は、ユニバーサルデザイン天文教育の普及に大きな進展をもたらしたといえます。

じつに多様なバックグラウンドの参加者がおられました。今まで天文に関わりの無かった方々も多数参加し、交流や理解を深めることで、ネットワーク形成の糸口ができました。

特筆すべきは、障害当事者がリードしたワークショップが4件あったことです。非障害者は、障害者が発信する現場を経験する機会も対話を通じて交流する機会もそう多くありません。そういう意味で、大きな成果であると言えましょう。またアジア地域への発信を念頭に置き、低価格のワークショップを目指したことも今回の特徴です。こちらも実践的で意義深い国際交流ができました。詳細は本特集のワークショップ報告をご覧ください。

最後になりますが、国立天文台スタッフをはじめ多くの方々のご協力と、国立天文台および天文学振興財団からの援助により、充実した会合ができました。この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

## 文 献

[1] 嶺重慎ほか(2012)第26回天文教育研究会集録 p.118-123

嶺重慎(2016)天文月報7月号 p.467-472